1 問題提起

火災が起きたとき、あなたは戻らずにいられるか？



防災の観点（論理）

- 危険な建物へ戻らない
- 安全な場所へ避難する
- 命を守るための合理的な判断

安全・冷静・合理的

VS

人間の感情

- 忘れ物を取りに戻りたい
- 大切な人がまだ残っているかも
- 自分だけが逃げてよいのだろう
- 何かしなければという焦りや責任感

不安・愛情・責任感

→ 防災の正しさと、人間の実際の行動との間にギャップがある。

2 本質の分析

人は、正しさだけでは動かない

情報を受け取る（知識）

→ 感情や状況を通して判断する（感情・経験・周囲の状況・人間関係など）

→ 行動する（避難・回避・選択）

人の意思決定に影響する要素

知識　感情　経験　周囲の状況　人間関係

正しい情報を知っていても、危機的状況で実際に行動できるとは限らない。
感情を否定するだけでは、住民の行動を変えることは難しい。

3 防災士の役割

正しさを押しつけるのではなく、寄り添い、安全な行動につなげる



伝える
科学的根拠に基づく正しい防災情報を伝える

→ **寄り添う**
不安や悩み、守りたいものを理解し、共感する

→ **備える**
避難計画・家族との連絡方法・持ち出し品などを準備する

→ **つなげる**
感情を受け止めながら、安全な行動を選びやすい環境を整える

正しい知識 × 寄り添う・理解する × 事前の備え → 安全な行動を支える

防災士の役割は、住民を説得することではなく、住民とともに安全な行動を実現すること。

4 結論と問いかけ

災害と戦う前に、己と向き合う



- 災害そのものを完全にコントロールすることは難しい。
- 人間の感情をなくすことも、感情を持つこと自体を否定することもできない。
- 防災士には、科学的な正しさを守りながら、人間の心理や自分自身の思考の癖にも向き合う姿勢が求められる。

私たちは災害と戦うべきなのか。
それとも、その前に、己と向き合うべきなのか。

＋ また、防災士は心の働きにどのようにアプローチしていくべきか

防災士の活動で感じたこと

1 40,50歳年上の防災士と共に活動した際

世代が違う → 話す話題、視点が違う
→ 同世代が私だけで会話に入れなかった。



2 身内ネタによる若者の巻き込み不足

若者が世代をまたいだ団体で活動しないのは世代の違いによる身内ネタで盛り上がってしまっているからかもしれない。
活動の場がつまらない場になってしまっている可能性。



3 根底には・・・

どちらが悪いとかではなく、当たり前に生じるもののため、お互いが意識すべきである。
また、若者が疎外感を感じないように“話題に巻き込む”というのは大人でも意識しないと難しい。



4 偏った年齢層で活動開始

経験知の継承が減少。視点のズレが生じて双方の良さを活かせず・・・もったいない。

何が必要か

防災で子供と関わるイベントを40歳以上の防災に携わる人で企画する。

疎外感を与えないことを意識したうえで異なる世代の交流会や意見交換会を開催してみる。

私の経験談

小学生とのボランティア

輪に入れない子に気づいて私から声掛けをした。
相手の関心に関心を持つことが大切。



自分は子供たちが好きな恐竜のネックレスをしてファーストインプレッションの引っかかりを作れるようにしてる。
恐竜が好きだからそこで一緒に語れるところもあるし、今と昔の恐竜図鑑の違いで盛り上がってもいい。



中学生との関わり

ボランティアの後輩である中学生と話す時も、たった6年の差で話の話題が合わない。
そもそも中学生だから社会経験もないし知識も少ない。



自分自身と相手がどのようにしたら楽しく話せるか考えた時、私は学校のイベントの話とか恋愛トークをして自分と共通点を探して、相手の考えを知ってコミュニケーションをとった。

